

第三節 杉本神社

第一項 構造形式と沿革

正倉東北の極近いところにある一間社、春日造、本瓦葺の社殿で、南面して建つ。正面に鳥居を設け、周囲を玉垣（瑞垣）で囲む。

正倉の鎮守であり、現在、開閉封の際には必ず参拝が行われる社であるが、その創建については詳らかではない。史料によると建久期（一一九〇～一一九八）には存在したようである。また、慶長期には「蔵王権現」を祀っており、慶長期の正倉開封及び修理に伴って造替されたことがわかる（注二）。その後、元禄期の正倉開封・修理に際しても造替が行われたようである。史料からは、正倉の修理に伴い造替することを習わしにしてきたことが読み取れ、元禄期もそれに倣ったものである（注三）。大仏殿再建後の東大寺境内図には「正倉鎮守蔵王権現社」として、大木と共にその姿が描かれている（注三）。

現在の社殿は、天保七年のもので、やはり正倉の修理に伴い造替された（注四）。この史料によると、檜皮葺として計画されたことが窺えるが、現状は春日造には珍しい本瓦葺となっている。大正二年正倉修理時の古写真があるが、そこには棧瓦葺の姿で写っている。大正期の修理で杉本神社の造替は行われず、大正四年に修理が行われたようだ（注五）。このとき棧瓦葺から本瓦葺に変更されたと考えられるが、確実な記録は見つかっていない（注六）。また、当初檜皮葺であったとすれば、棧瓦葺になった時期も現状から特定することはできない（注七）。

昭和三十九年（一九六四）には、鳥居と玉垣の修理が行われた記録が残っているが、この記録から社殿は修理されていないと思われる（注八）。

今回の正倉修理に伴い、杉本神社は、屋根葺替と塗装の塗り直しを行い、面目を一新した。また、鳥居並びに玉垣は建て替えた（金物一部再用）。

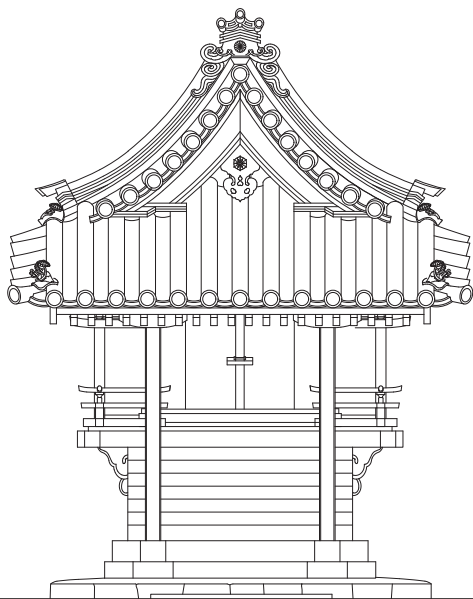


図285 杉本神社南立面図

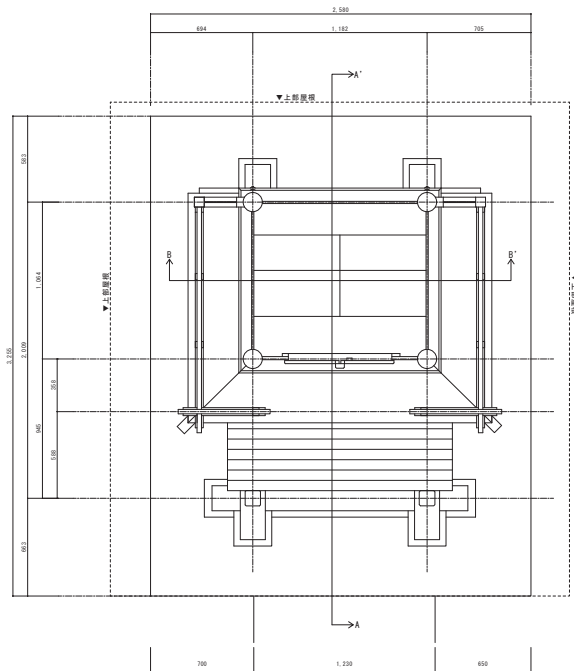


図284 杉本神社平面図

第二項 実施仕様

一 仮設工事

単管による素屋根を設けた。使用材料や工法は、正倉の仮設工事に準じた。

二 解体工事

社殿は、屋根の瓦と野地板のすべてと野垂木の一部までを解体した。鳥居は、基礎のコンクリートまで解体し、玉垣もすべてを解体した。注意事項は、すべて正倉の解体工事に準じたが、鳥居の基礎コンクリート解体時には、奈良県埋蔵文化財担当者の立ち会いを依頼し、遺構などを確認しながら慎重に行った。

三 基礎工事

(一) 計画

鳥居の基礎にコンクリートを打設した。

(二) 材料

普通コンクリートとした。

(三) 工法

型枠を組み、スリーブ管によって鳥居の柱部分を空け、コンクリートを打設した。養生期間を経た後、型枠を解体し、周辺を埋め戻した。

四 木工事

破損している部材は同材種で取り替えあるいは繕いを行った。特に地面に接する鳥居や玉垣の足下には、防腐処理を行った。材料・工法は、すべて正倉の木工事に準じた。防腐剤には、キシラモントラッドを使用した。

五 屋根工事

(一) 計画

社殿は本瓦葺であった。屋根は取解く前に破損調査を行い、各瓦の年代、形状、寸法、葺足、瓦割り等を調べた。その結果、特に変更された痕跡は認めら

れなかったので、再用できる瓦はできるだけ再用し、旧状の通りに復旧した。

(二) 材料

再用瓦・補足瓦については、正倉の屋根工事に準じた。丸瓦及び棟積の葺土には防水剤・硬化遅延剤・不凍液配合の既製品（シルガード（黒））を用いた。

(三) 土居葺

野地の上に、アスファルトルーフィングを敷き込んだ。

(四) 工法

平葺は、乾式工法（空葺）とし、正倉の屋根工事に準じた。

六 塗装工事

(一) 計画

社殿の外部及び扉の表裏は、全体に塗装されていたので、一旦すべて掻き落とし、塗り直した。塗り直しには、科学的分析により修理前の材料を特定し、その上で改めて塗装材料を選定した。科学的分析の結果は、赤色系は鉛丹、黄色系は石黄、白色系は胡粉、という結果であった。

今回の修理で、垂木鼻先の上まで黄色系だったところを調整丹に、脇障子竹の節が赤色系であったのを、墨塗に改めた。

(二) 材料

赤色系の部分は、少し彩度を落とすために調整丹とし、鉛丹一〇〇に対して一の割合で弁柄を混ぜたものを使用した。黄色系の部分には石黄は入手が困難なため黄土を、白色系の部分には胡粉を、黒色系には松煙墨を用いた。溶剤には、膠を用いた。

(三) 掻き落とし

素地を傷めないように鉄ヘラなどで丁寧な掻き落としをした。

(四) 塗装

髹水引きによる下地処理の後、各色とも刷毛により下塗及び上塗を行った。

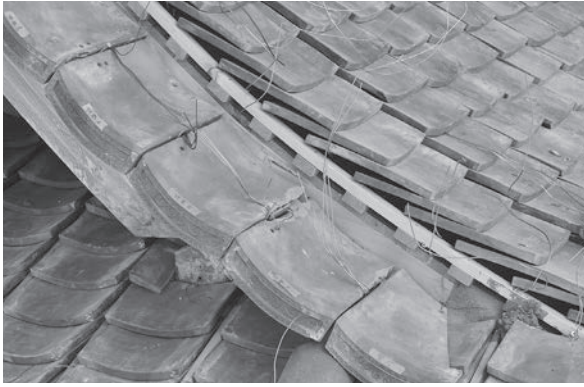


図290 本瓦葺正面螻羽の納まり（組立中）



図286 丸瓦解体後の状況



図291 調整丹の湯煎



図287 平瓦解体後の状況



図292 杉本神社竣工正側面（東南面）



図288 野地板の状況



図289 野垂木の状況

第三項 調査事項

一 破損状況

(一) 環境

杉本神社の脇には、正倉の修理前まで杉の大木があり、さらに正倉の北側でもあり、日当たりの悪い状況であった。また、背後にも樹木が茂り、常に湿気の高い状態であった。

(二) 軸部

土台に少し腐れが入っていたり、仕口部分で幾分緩みがあったものの、全体には健全で、特に顕著な破損は見当たらなかった。

(三) 屋根

瓦は、表面が湿気のために緑色に変色している状態であった。葺土には粘りがなくなり、瓦葺はずれを生じ、棟には脱落した瓦もあった。降棟の獅子口は傾いているものがあり、留蓋も欠失しているものがあるなど、屋根は全面的に葺替時期に来ていたが、雨漏りは生じていなかった。

(四) 塗装

赤色塗料や黄色塗料は、色がはけてきており、全体的に白っぽくなってしまっていた。また、剥離が始まっており、部分的には素地が見えていた。

(六) 金具

六葉や唄は、表面には錆が出てきていたが、欠失している部分はなかった。

(七) 鳥居・玉垣

鳥居は、木部が腐り始めており、笠木はすでに断面形状に変形を来していた。玉垣は、控えが掘っ立てのため腐っているものもあった。



図295 杉伐採直後の屋根の状況



図293 杉本神社修理前正側面（西南面）



図296 土居葺の破損状況



図294 杉本神社修理前周辺の環境

二 形式技法と変遷

(一) 平面計画

杉本神社は、慶長期から正倉の大きな修理の際に造替されてきたことがわかったが、元禄期と天保期の史料からその寸法がわかるので記載しておく。

元禄期 桁行三尺五寸 庇三尺二寸 梁間三尺九寸 軒高七尺一寸

天保期 桁行（庇を含む）六尺六寸 梁間三尺九寸

比較するまでもなく、同じ大きさで造替されたことがわかる。元禄期には柱の太さまで記載があり、四寸四分とある。現状は天保期の建物であるからそれを測ると一三〇mmであり、現行尺で換算すると四寸三分となり、やはりほぼ一致することがわかった。

(二) 基礎

三笠山安山岩（両輝石安山岩）による間地石を一段並べ、基壇状の台をつくる。そこに花崗岩の切石を布石に並べ、礎石とする。礎石の周囲はコンクリート洗い出しとなっており、大正期の仕事と思われる。

(三) 軸部・柱間装置

土台を回し、その上に柱を立てる。柱は、身舎が円柱、庇が面取りの角柱となる。角柱は一〇六mm角で、八mmの面を取る。身舎は、腰長押と内法長押で固める。すべて天保期のままである。身舎は柱間は正面が両開きの板戸、そのほかは板壁で、正面以外は横板を柱に突いた溝に嵌め込みとする。小屋裏の天井板の目板に胡粉塗装の残る旧壁板が発見されたことから、現在の壁板は、大正修理の際に取り替えられたものと思われる。板戸は現在、堅門に箱錠で戸締まりされているが、板戸内側に猿の痕跡があり、これが当初と思われる。

(四) 軒廻り

庇は、柱の上に舟肘木を載せ、桁を受ける。舟肘木には虹梁を組み、身舎柱と繋ぐ。身舎も柱上に舟肘木を載せ、桁を受ける。化粧垂木は繁垂木に配し、



図299 化粧裏板墨書「正倉院御用木」



図297 裏甲天端の状況



図300 縁を支える持送りの絵様



図298 庇の肘木と桁

化粧裏板を流し板に打つ。垂木先に茅負を打ち、裏甲を載せる。裏甲は、和釘の痕跡があり、洋釘にて打ち直されていた。この上端に竹釘の跡などが無いので、天保期当初から瓦葺であったと考えられる。

(五) 小屋組

小屋組は、身舎の桁上に片蓋の化粧扱首と扱首束を立て、やはり片蓋の斗を置き、桁行方向に肘木を組み、化粧棟木を載せる。この棟木の横に野垂木が釘止めされる。棟木の上には丸太材の野棟木を置き、さらに野垂木を打つ。この野棟木は化粧棟木と鏝で止められるだけで、ほぼ宙に浮いている状況であった。庇は、化粧野地の上に土居桁を一筋置き、野垂木は裏甲とこの土居桁に渡し釘止めしていたが、妻の奥は浮いたままであった。

(六) 野地

土居葺と野地板は前回の修理によるもので、洋釘止めであることから昭和期の材料と思われる。土居葺は、厚さ二mmほどの機械割の扮板であった。

野垂木は止直しに洋釘が使われていたものの、元は和釘で止められていたことから天保期当初の部材であると判断できた。底部の土居桁を外したところ、化粧野地の上は汚れがなかったことから、天保期に建造されて以後、外されていなかったものと思われる。ここに墨書のある木片があったことから建立年代がわかった。

(七) 屋根

春日造には珍しい本瓦葺となる。軒平瓦は興福寺式の瓦当文様を持ち、軒丸瓦は菊文とする。大棟は菊丸瓦を真ん中に挟み、割熨斗瓦六段積、肌熨斗瓦二段積、降棟は割熨斗瓦四段積となり、どちらも獅子口に経の巻で納める。瓦はべた葺きで、葺土を厚く置いて屋根の形を整えていた。

(八) 縁廻り

正面木階七級。周囲には縁を巡らせ刻高欄を配し、奥には脇障子を設ける。

三 科学的分析

(一) 塗装材料

杉本神社には赤、白、黄の塗装材が用いられていたが、修理に先立ち、その材料を確認するため、X線回折及び蛍光X線分析を実施した^{注九}。

(二) 分析結果

イ 赤色色料

X線回折により、四酸化三鉛 (Pb_3O_4) が検出され、また元素としては蛍光X線分析により鉛 (Pb) と微量の亜鉛 (Zn)、銅 (Cu)、鉄 (Fe)、チタン (Ti)、カルシウム (Ca)、塩素 (Cl)、ケイ素 (Si) などが検出された。これらのことから赤色色料として鉛丹が用いられていることがわかる。

ロ 白色色料

X線回折により、硫酸カルシウム二水和物 ($CaSO_4 \cdot 2H_2O$) と石英 (SiO_2) が検出され、また元素としては蛍光X線分析により亜鉛 (Zn)、チタン (Ti)、カルシウム (Ca) と微量の鉛 (Pb)、鉄 (Fe)、イオウ (S)、ケイ素 (Si) などが検出された。これらのことから白色色料としては硫酸カルシウム二水和物が確認でき、またチタンホワイトの存在が推定できる。なお両者がそれぞれ異なる層をなすのか、あるいは同じ層で混合されて用いられているかについては不明である。

ハ 黄色色料

X線回折により、硫酸カルシウム二水和物 ($CaSO_4 \cdot 2H_2O$) と石英 (SiO_2) が検出され、また元素としては蛍光X線分析により鉛 (Pb)、砒素 (As) と少量から微量の亜鉛 (Zn)、鉄 (Fe)、チタン (Ti)、カルシウム (Ca)、カリウム (K)、塩素 (Cl)、イオウ (S)、ケイ素 (Si) などが検出された。砒素 (As) が検出されていることから黄色の色料としては石黄 (As_2S_3) が考えられる。

注一 「三倉日記」(一四一部四五八号) ○東大寺図書館

(表紙)

「 元禄二年 四聖坊

三倉日記

(前略)

口上覚

一、慶長八卯年 東照権現様今南都東大寺三倉

御開封被為 仰付候時分鎮守蔵王権現之社も御

造営被為 仰付候

一、同所八幡宮神主上司式部方之遷宮記録

吟味仕候処慶長八年鎮守社御造営被為 仰付候

則遷宮料米十四石五斗余大久保十兵衛殿

今御渡拜領仕候由右之記録ニ相見へ申候

一、寛文六年 厳有院様今三倉御開封被為 仰付候

時分ハ御倉損シ不申候付御修復無御座候鎮守社も

御造営無御座候御倉御修復之時者必鎮守社

御造営被為 仰付候古法ニ而御座候且慶八年ニ御

造営被為 仰付候鎮守社及破損候故寺中今下遷

宮ニ仕置其後も破壊之時分ハ右之通ニ仕成り候儀ニ

御座候此度三倉御修復被為 仰付候儀ニ御座候間古

例之通鎮守社御造営被為 仰付候様ニ寺中奉願候

以上

東大寺役者

見性院

元禄六年西六月十四日

年預五師

四聖坊

竹村八郎兵衛殿

注二 東大寺薬師院文書などに記録が見られる。

注三 江戸時代初期、大仏殿再建後と思われる東大寺境内図が四枚、東大寺に伝わるが、社殿はそれぞれに描かれる。そのうち最も古い、大仏殿再建直後と思われる絵図には「三倉鎮守蔵王権現社」と記す。

注四 今回の修理に伴う解体で見つかった木片に墨書があり、建立年代が判明した。また、正倉の天保修理を記した中井家文書の「南都東大寺正倉院絵図」(図23及び図版写真22参照)にも、社殿の図の脇に「鎮守社新造」の朱書があり、正倉修理に伴い社殿が新しくされたことが裏付けられる。図には、桁行六尺六寸、梁間正面三尺九寸と記されており、現在の建物の実測寸法(桁行六・六三尺、梁間四・〇五尺)とほぼ合致する。また一連の絵図に、「正倉院御宮屋根之図」という屋根面積を調べた図があり、その図には檜皮葺の仕様が見られる。

注五 大正四年の棟札が社殿内部東北隅の柱に釘止めされていた。それによると、これまでのような造替ではなく、鳥居や瑞垣と共に「修理」されたことがわかる。

注六 岡本家文書(京都府立総合資料館所蔵)の「大正二年正倉院構内宝庫鎮守杉本社修繕工事費概算調」にある仕様には、「一家根瓦京都大仏特製両面磨キ瓦百枚モノヲ以テ軒唐草軒巴破風廻リハ銅線及銅釘ニテ丁寧ニ土葺(後略)」とある。この記載には、軒平瓦(軒唐草)と軒丸瓦(軒巴)が使われているところから本瓦葺の仕様であることがわかる。これが実施されているとすれば大正四年の修理で瓦葺が本瓦葺に変更されたことになるが、この仕様は、現状と一致しないところが多いため確実ではない。

注七 調査事項で述べるが、現状の裏甲は和釘止めの痕跡があり、天保期の材と思われるが、この裏甲天端に檜皮葺の軒付痕跡が見いだせない。

注八 宮内庁京都事務所所蔵文書による。

注九 第三章第二節第四項参照。

第四節 消火栓配管工事

正倉整備の周辺外構工事に伴い、古い消火栓配管及び消火栓並びに放水銃の交換を行った。これは掘削を伴う作業のため、今回の外構工事と同時進行させる方が効率が良い、との判断から行ったものである。消火栓配管工事は、二〇一五年以降、貯水槽から正倉院の敷地までの配管交換も計画されている。

水道管は、昭和十二年に設置された鑄鉄管であったが、今回、ポリエチレン管（径二〇〇A）に交換した。

消火栓も、昭和十二年に設置されたもので、正倉の四隅に設置されていた四基をすべて取り替えた。地上式単口、径八〇A×径六五Aとした。

放水銃は、昭和四十二年に増設されたもので、消火栓の際に設置されていた四基をやはりすべて取り替えた。ギヤ式、径八〇A×径六五Aとした。



図303 掘削と配管撤去後（奥）の状況



図301 昭和十二年に設置された消火栓配管



図304 放水銃の送水試験



図302 新規ポリエチレン管と切り離した既存管